

「底が突き抜けた」時代の歩き方 264

なにもかも失う充実にむかって歩いていく -

佐藤洋二郎『おーい、宗像さん』

作者とおぼしきわたしは16年前、仲間とはじめた基礎工事会社で働く一方、小説家になるために同人雑誌にも加わっていた。若い頃、失明状態にあった母親に小説家の夢を《告げると、まっとうに生きてくれと、見えない目に涙をためて泣かれ、まじめに生きてくれなければ》、弟妹にも影響すると頼み込まれたが、一度だけ書いた作品が「三田文学」に掲載されたために、有頂天になってろくに働かず稚拙な小説ばかり書いていた。食い詰めては血を売ったり、日雇い労働で暮らし、行き詰まると建設宿舎に入って、全国からの出稼ぎ労働者と共に工事現場で働くか、酒を飲むかしかない生活を送った。それでも小説は続け、出版社に持ち込んだり、知り合った人間と同人雑誌をやろうとした。

その頃、新聞社勤めの宗像と初めて知り合い、父親の郷里福岡の玄海町に宗像神社があったために、少年時代に、おーい、船方さん、船方さあ、んよ、とよく流行った歌を、おーい宗像さんと勘違いして覚えていたことがあった。宗像との話の中で、彼の通っている町医者が妹の嫁ぎ先の義父であることに驚き、彼はアル中の妻と別れ、その妻が入院中であることまで初対面のわたしに話す。4、5年が経って、わたしは遠賀川沿いで坑夫たちの宿舎と石炭の運搬業を家業とし、働きもせず、坑夫たちと昼間から酒ばかり飲んで、40歳の若さで死んだ父親のことを長編小説に書き始めたり、別の作品が新人賞の候補作になったりして、小説の依頼がくるようになる。

文芸評論家の秋山駿を囲む暮れの一泊の温泉旅行で宗像に再び出会い、地方の支局長をやっている宗像は宴席で、秋山に会社を辞めて小説を書けと盛んに発破を掛けられている。温泉で宗像と一緒にあったわたしは、彼から小説家であることを羨ましがられ、「生活も成り立たないし、文学、一生、やせ我慢というところがあるだろ？ 性悪女にひっかかったところがあるよな。そこへいくと、きみは会社も経営しているし、なにもかもうまくいって楽しいんじゃないの。違う？ 世の中にはたまにきみみたいな人間がいるんだよなあ。頑張っても頑張っても駄目な人間が、ぼくは好きなんだけど。またそういう人間のほうが魅力があるだろ？」と訊ねられる。《「生活のことなんか計算しちゃいけないんだ。書き続ける勇気を持たなくちゃ。きみにはあるのか？ ぼくにはあるさ。妻も子供もないし。住んでいるところだって賃貸だしな。駿さんと同じだろ？ おれたちはよく似ているのさ」

宗像はことさらに秋山さんと親しいということを強調した。わたしは心に小さなささくれを感じた。宗像の時折見せる粘着な言葉の攻撃性は、感じのいいものではない。わたしはふと彼の妻が、アルコール依存症になったのは、本人も言うように、彼のせいではないかと感じた。》

妻との出会いや、アルコール依存症のことや、新聞社の稼ぎがみんな酒代に消えていたことなど、宗像は自分たちの身の上話をなんでも語って聞かせ、「これだけでもぼくが小説を書ける気がするだろ？」と訊ね、「書けるだろ？ 書けないはずがないよな」、みんながそれを書けと言うので、会社も辞めると不安定な感情が揺れるように呟く。それから2、3年して宗像は新聞社を辞めず、わたしのほうが先に会社を辞めることになった。40半ばになっていたわたしは、いよいよ目が悪くなっていく母親と同居するために一戸建てを購入するが、彼女が生まれ故郷を離れたがらないことに気づく。ある日、過労からトイレで倒れて病院に担ぎ込まれたわたしは、心臓発作で倒れた父親のことも想像しながら、小説が書ける良好な状態をつくるために会社を辞める。

会社を辞めた数か月後、かつての仕事仲間がわたしの家を担保にしてお金を用立ててくれと土下座までして哀願するので、わたしは気心の知れた相手を信用して家を担保に2千万円の融資を受ける。しかし会社の資金繰りもきびしくなって、和議申請にまで追い込まれ、債権者であるわたしは一転債務者の立場に追いやられてしまう。結果的にわたしは個人的な負債として毎月20万近くのお金を支払わねばなくなるが、妻が持っていたお金を掻き集めたり、短大の文学の講師の口のほかいくつかの講師の職を得て、借金の返済額だけはなんとか確保しながら、原稿で生活費を稼ごうと割り切る。みんなと顔を合わすたびに会社を辞めるといって辞めなかった宗像は、忘年会でいよいよ会社を辞めると報告し、「いま辞めるとこれだけもらえるんですよ」と彼が示した5千5百万円の金額に誰もがあきれ返る。それでも「27年間働いてそれだけだから、多くはないよ」「それにこれからも働けば3年分しかないもの」と平然という宗像に、わたしは作業現場で汗水垂らして働く職人のあまりもの稼ぎの少なさを思い浮かべて複雑な思いになる。

宗像は東大を首席で卒業した祖父の話になると明るくなる。三井の番頭から最後は関連会社の社長をいくつかやった祖父の財産も、音楽大学の教授だった父親を経て、7人兄弟の長男に生まれた宗像の三代目になると続かなくなり、商売をやっては失敗して資産を減らしている長女夫婦と暮らす母親の相当な生活費を彼が面倒みているために、新聞社を辞められないのではないかという気がしてくる。長女夫婦は《母親を人質にしていると罵った。自分と妻と一緒に住もうと誘っても絶対にそうはさせなかったし、母親が住んでくれたり、子供ができたりにしていたら、妻もあんなふうにはならなかったのではないかと言》う《宗像の言葉の中にはだんだんと没落していく家族の哀しみと怒りが滲み、それをとめられない苛立ちが感じられもした。祖父の話はしても、そのほかの家族の話をしようとはしない宗像の心の内には、わたしたちが知らない秘密があったし、そのことにいつも葛藤しているようだった。自分の感情を処理できないでもいた。》

宗像が新聞社を辞めたのは、退職すると言ってから5年後のことである。新宿の酒場でひとりで淋しそうに飲んでいる宗像を見かけ、話を聞くと、小説を書いている様子も、別に仕事を持っている気配もなかった。彼は次の週からわたしが講師をしているカルチャースクールにやってきて、それから2週間に一度教室に来て、そのあと受講生たちと酒を飲み、泥酔するまで帰ろうとせず、読書をしている風でもなく、小説を書いている素振りも全くみせなかった。それなのに受講生の前ではいまこういうものを書いている、書物も一万冊は読んでいると吹聴し、元新聞記者の肩書きもあって彼は少しずつ影響を

持ち始めていた。恒例の忘年会で宗像が新聞社を辞めたことを知った周りは、酔いの戯れ言のように彼の多額の退職金の一部をわたしに貸すぐらいの施しを見せなければ、いい小説は書けないと煽られて、意地になった彼はわたしに2千万円を貸すことを皆に約束してしまう。

酔ったときに宗像は教室の受講生の作品の添削をやっていると話し、彼らから先生と呼ばれて喜んでいる。そして話は忘年会のときのお金の件に行きつく。付き合いのなかで姉夫婦の多額の借金や母親の相当な生活費を彼のこれまでの給料から捻出しており、新聞社を辞めてからの今後どうなるのか、彼が明らかに苛立っているのが感じ取れる。そんな彼にいつまでも頼り切っている母親や姉夫婦への鬱憤が、毎晩のように彼を酒に駆り立てているようにみえ、それは家族へのやさしさよりも、自分自身の焦りや弱さだとわたしは思うようになる。彼はよく妻の病気を自分の所為にしたが、無理に抑制している感情が爆発して、妻を攻撃しては自分の気持を宥めていたのではなかったか。

しばらく宗像は教室にも来ず、連絡もなかった。脳血栓で緊急入院していた彼から電話があり、深刻ぶった相談を持ちかけられる。会って話を聞くと、酒場で知り合った人間と会社を立ち上げるといふ胡散臭い話しであり、わたしが、小説を書くために会社をやめた筈なのに、どうして今更会社設立などにかかわろうとするのかということ、不快な表情になって別の話に換えていく。一カ月後に会うとまたその話を持ちだし、もう計画が進んでいるらしいことがわかる。数日後わたしを呼び出した宗像はこういう。「おれはなにもかもわかっているのさ。約束したからな。困っているのを助けるのは、おれの務めだからね。あいつがどういう奴でもいいんだ。あわれでね。なにもかもほらで固めて生きているところが、かわいそうじゃないか。栃木弁も直らず、どうしても嘘をつかなければ生きられない環境にいたんだろ。つらいとおもうんだよ、本人がいちばん。だからなんとかしてやりたくなったんだよ」

わたしは危うさを感じて、断りにくいのであればあいだに入ろうかということ、宗像は「最後はおれが決めるからいいんだよ」と拒絶する。何度も呼び出されて相談を持ちかけられたわたしは重い脱力感に襲われ、「それじゃ、しかたがないね」と呟く。

《「おれはつらい目に遇っている人間を見ると、どうしても助けたくなるんだよ」

そういう人間は自分の周りにいくらでもないかと問いかけてやめた。老いた母親。生活に追われている姉弟。アルコール依存症の元妻。わたしはそこまでかんがえていちばんつらい目に遭っているのは、宗像ではないかとおもった。それなのにもっとそういう目に遇いたがっている。やはり病気なのか。はじめて会ったときに、分裂症だと言ったときの彼の顔が浮かんできた。》

宗像が興した会社は受注はまだ一件もなく、相手の男には90万の給料を払い、彼はすでに900万を投資していると聞いて、忘年会で秋山駿が「おめえ、馬鹿なことはやめろ」といっても、《宗像は頑固というよりも駄々っ子が、あまえて拗ねているという様子だった。人には魔が差すということがあるが、宗像はそのもののけに取り憑かれていた。(中略)わたしたちは呆れるというより、なにを言っても無駄だという諦めの気持ちに支配されていた。これをやらないと生きていけないんだと彼がふたたび言うと、仲間は手の施しようがないというふうに押し黙った。

宗像をこれほどまでに信じ込ませた男は、どういう人間かと話題になったが、聞けば聞くほどいいかげんな男だ。また宗像はそのことを知って突き進んでいたが、彼をそこまでさせるものがなにか誰もわからなかった。》

会社はうまく行かず、退職金は半分以上注ぎ込み、母親たちの住む家も処分し、そのお金も当てていると聞いたある日、わたしの貯金通帳に宗像からの500万円の振り込みがあった。《やがて宗像はなににもなくなることを想定している。いまはなににも見えなくなって病気だ。誰とも会わないし小説も書かない。わたしは彼がなにもかも失いたいのだとかんがえることにした。すべてを失ったとしても死ぬわけではないし、生きていけないわけではない。助けてくれと言わないのに、なにかをしようとするのはお節介だ。

そしてやがて一年がすぎようとしている。宗像は誰とも連絡を取っていない。受注がなくますます窮地に立たされているという噂を耳にする。時間が経過すると、わたしはなぜ宗像に固執したのか、漠然とだがわかるようになってきた。悩んだり意固地になったり、見栄を張ったりする彼の姿が、わたしの心の中に眠っているのだ。築きあげたものをなにもかも壊したくなる。物事がうまくいけばいくほど、これでいいのかと不安になる。堕ちまいとすればするほど堕ちる場所が気にかかる。蟻地獄でもがく虫のように、もがけばもがくほど深みにはまっていく。すべて捨て、堕ちた場所で堕ちた者のよろこびを感じようとしているのか。それとももっと生の実感を肉体に刻もうとしているのか。何人もの家族を背負い、ずるずると坂道を後退していく彼の姿が見えた。人間は好きなきに、おもったように生きられるのがいちばんさ。わたしたちに詰問された彼は、開き直るように言った。

宗像がすべてを失い路頭をさ迷っている姿が見える。わたしはおーい、宗像さんと呼ぶが聞こえない。おーい、宗像さん、宗像さあーんよー、土手で呼ぶ声、聞こえぬか、と歌ってみる。宗像の姿はだんだんと遠くに消えて行く。なにげなく後ろを振り向いた彼の顔は、穏やかでわらっている。するとわたしの脳裏に、酔って歌っていた父親の姿がにじんできて、宗像の姿と重なった。おい、おれたちはいまがいちばん幸福なんだよ、となにもかも失った彼らがほほえみかけた。わたしは一瞬置いてきぼりを食らったような哀しみが、心の奥深い場所からわいてきて、もう一度、おーい、宗像さんと呼んでみたが、彼の後ろ姿はまた少しずつ遠退いて行った。》

作家佐藤洋二郎の小説『おーい、宗像さん』（『群像』01・12）のストーリーは、このように終わっている。荒川洋治はこの長編について、次のようにいう。

《魅力的な人が周囲にいないと小説もまた「近くのもの」でまにあわせることになる。「近くの」凡人を描く作者の筆は、伸びている。（中略）

こんな男を、いかにじょうずに、いきいきと書いたとしても（作者の腕は示せるものの）読む人の心は、少しもゆたかにならない。周囲や社会に異常な人間がはびこり、それに対抗するために凡人を設定するのならわかるが、この小説にも、宗像にも、その力はない。

小説を書くことは「複雑で多様な感情を持っている人間を文章で立ち上がらせる」とたと「わたし」は述べるが、「やめる、やめない」「書く、書かない」の二種類しかない男に「多様」性を望むのは無理だ。》

宗像のような魅力のない男でも、《とてもなめらか》に、《誰もが抵抗なくうけいれることができる》のは、作者の筆力の故であり、《筆力とは、その作品が「愛されているとき」に身につくものである。《「おーい、宗像さん」の筆力は作者が「現在」をもつことから生まれたものだ》と、荒川氏はいう。では、「現在」はどこにあるか。作者はどのような「現在」をもったのか。荒川氏はこう続けるだけだ。《文章だけではない。書くのか書かないのか。会社をやめるのか、やめないのか。戦争か平和か。それがかりそめのものであれ「現在」のしるしをもつことをいま強く求められるようになっているのは、選択や決断の向こうに、これまでならあったはずのものが見えないからだ。人間の目に見えるものがなくなってきたのだ。》

「書くのか書かないのか。会社をやめるのか、やめないのか。戦争か平和か」という二者択一に収まりきれないのが、本来人間である。「複雑で多様な感情を持っている人間」は、単純な二者択一を越えたところで生きている。ところが、人間が本来持っていた筈の「複雑で多様な感情」というものが、あれかこれかの白黒を迫ってくる現実の勢いに抗しきれずに、誰もが、あれでもなければこれでもないという場所に立ち尽くす余地を持たなくなっている。人間の「複雑で多様な感情」がそのままのありかたでは耐えられなくなって、しだいに二者択一的な感情へと磨滅していきつつあるのが、感情のみを突出させようとする人間の「現在」であろう。小説の中の宗像は自らが望むようにして、《ずるずると坂道を後退していく》。これは「やめる、やめない」と迷いつづけて漸く会社をやめ、「書く、書かない」の岐路に自分を追い込んだ挙げ句に書かなかった男にふさわしい末路なのであろうか。

考えるまでもなく「やめる、やめない」ことと、「書く、書かない」こととは全くかわりがない。会社をやめなければ書けないなどということがありえないように、やめれば書けるというものでもありえない。書かない宗像は会社を辞めれば、書く自分がいずれ立ち現れてくるだろうと考えつづけていることによって、書く自分などどこにも存在しないことを薄々予感していた。しかし、会社をやめて時間がいっぱい転がり込んでくれば、否応でも自分は書くようになるだろう、という気持があった。宗像の勘違いは、自分の中に書きたいものはたくさんあるかもしれないが、なにひとつ書くものはないということにあった。書くことに自分が捉えられていないということにも、宗像は気づいていたかもしれない。たぶんなにもかもわかりながら、自分の見知らぬ自分に出会いたくて、彼は会社を辞めた。だが、それだけのことであった。書く自分が現れてくることもなければ、なにも変わらず、残ったのは多額の退職金のみであった。

書く自分を望んで会社を辞めたのに、書く自分に出会えなければ、退職金もほとんど泡銭にほかならなかった。その泡銭がどのような使われかたをしていくことになるのかは、目にみえていた。荒川洋治がいうように、作中の宗像はそれほど魅力的でもないし、「近くの」凡人そのものである。確かに「こんな男を、いかにじょうずに、いきいきと書いたとしても（作者の腕は示せるものの）読む人の心は、少しもゆたかにならない。」けれども、この凡人はだが、「築きあげたものをなにもかも壊したくなる。物事がうまくいけばいくほど、これでいいのかと不安になる。堕ちまいとすればするほど堕ちる場所が気にかかる。蟻地獄でもがく虫のように、もがけばもがくほど深みにはまっていく。

すべて捨て、堕ちた場所で堕ちた者のよろこびを感じようとしている」かのような、不穏さ、あるいは破滅志向をかかえこんでいる。

凡であろうと非凡であろうと、人には「なにもかも失いたいのだ」といわんばかりに、破滅にむかって一直線に突き進むような生きざまをさらしてみせるようなところがある。その勢いを思いとどませようと、周囲がいくら忠告しても聞き入れない。しかし、破滅にむかってまっしぐら、にみえるのはあくまでも周囲であって、当の本人にしてみれば、「好きなときに、おもったように生きられるのがいちばんさ」という気持であるかもしれない。作者からみれば、宗像は明らかに「何人もの家族を背負い、ずるずると坂道を後退していく」としか映らない。だが、そのような彼の姿に彼自身がもっとも充実感を覚えているとするなら、外にみえる姿と内にある姿とのこれほどの大きな落差は、一体なにを意味しているのだろう。

自分たちの中に共にいると思われた宗像は、自分たちの声がもはや届かぬところまで遠ざかっていく。「するとわたしの脳裏に、酔って歌っていた父親の姿がにじんできて、宗像の姿と重なった。おい、おれたちはいまがいちばん幸福なんだよ、となにもかも失った彼らがほほえみかけた。わたしは一瞬置いてきぼりを食らったような哀しみが、心の奥深い場所からわいてきて、もう一度、おい、宗像さんと呼んでみたが、彼の後ろ姿はまた少しずつ遠退いて行った。」なぜ私がこの作品に引き寄せられてきたのか、それはこの個所に際立っている。作者にあるのは筆力だけではない。その筆力が「現在」を鷲掴みしているだけではない。宗像や若死にした父親の姿が、ろくでもない破滅的な一生を送った哀れな者たちとしてではなく、逆に「おれたちはいまがいちばん幸福なんだよ」とほほえみかけてきて、作者のほうで「一瞬置いてきぼりを食らったような哀しみ」を感じるという、彼らのような存在のありかたへの肯定的な視線をなによりも作者は獲得している。

作者が「一瞬置いてきぼりを食らったような哀しみ」を感じるのは、「なにもかも失った彼ら」のほうが一応安定した生活を築いているようにみえる自分と違って、本当によく生きる者たちではないかという気持をもっているからだ。彼らの姿に「おれたちはいまがいちばん幸福なんだよ」というほほえみを感じ取るのは、「いまがいちばん幸福なんだよ」といえる自信が自分には到底ないと、作者が思っているからである。彼らは「なにもかも失った」ようにみえて、本当は充実した時間を生きていたのであり、なにも失っていないようにみえる自分こそが、もっともなにかに深く拘束されて、「好きなときに、おもったように生きられ」ていない人間なのではないかという内省が、この個所にはみなぎっている。なにかにしがみついて生きざるをえない者たちの「哀しみ」の中に自分を置いて、「坂道を後退していく」彼らの姿に人間としての本来の輝きを見出していることが、この小説を感慨深いものにしているのだ。ところで、自分が身につけていたなにもかもを失っていくことは、身一つで生まれてきた人間にとって本来的なありかたではないだろうか。会社を辞めてなにも書かなかった宗像は、自分のすべきことをなにもかも失うことに向け、自分の人生を完結させようとしていたようにみえる。

2001年12月22日記